

礼拝：2021年10月3日（日）世界聖餐日 世界宣教の日
（聖霊降臨節第20主日）

交読：詩編 82 編

聖書：レビ記 25 章 39～46 節

ルカによる福音書 17 章 1～10 節

説教：「からし種一粒の信仰」 佃 雅之

私たちは、今、それぞれの場所で家庭礼拝を献げています。礼拝堂に集まったの礼拝を休止して、今朝で 9 週を数えます。家庭礼拝となったすぐ後のことだったでしょうか、ある方が「孤独な礼拝者が増えているので、その方々のために祈って欲しい」と言われました。今こそ、私たち教会は、ただ十字架の主を信じて、一致して祈る時が与えられたのだと思ひ知りました。当教会の創設者、高倉徳太郎牧師はキリスト者の祈りについて「祈りは単なる魂の独語であってはならない」と言われています。それは、真の祈りは活ける神との対話でなければならないからです。ですから高倉牧師は、「神まず語って、我聴くところに真の祈りが成立する」と言わたのです。神の語ってくださる御言葉を聴き、熱心に祈られた高倉牧師は「私共の教会は、まことに微弱な欠点だらけのものです」としみじみと主に告白されています。今日の福音書の御言葉に照らすなら「わたしどもは取るに足りない僕です」ということになるのでしょうか。いずれにしても、御前にあって真の思いで祈ることができたなら、ありのままの自分の心と向き合えたなら、祈りが深まり、御言葉が私たちを悔い改める者へと導いてくださるに違いありません。今はまだ会堂に集うことができませんが、今朝も私たちは主の御前に跪き、御言葉に聴き、祈りを深めたいと思います。

今日の箇所ではキリストは弟子たちに向けて「キリストを信じて生きるとはどういうことか」を教えます。

3 節でキリストが弟子たちに「あなたがたも気をつけなさい」と語っています。弟子たちが、そして私たちが、キリストを信じて生きるための忠告の言葉です。文字通りには「自分自身に心向けなさい、自分自身に注意を払いなさい」という意味です。御前にあって、御言葉を聴き、熱心に祈ることができたなら、私たちも自分自身に注意深く心向けることができるでしょう。きっとありのままの自分自身があらわれるに違いありません。

キリストは弟子たちに「つまずきは避けられない」と語ります。御言葉に導かれ、自分自身を見つめることができた私たちが気づき、出会うものは「つまずき」とキリストは言われます。この世界で生き、キリストの福音を宣べ伝えようとする私たちに、つまずきは避けられないからです。「つまずき」とは罪への誘惑であり、罪への罠です。ある学者は「罪」を神に反抗するエネルギーだと言い、聖書はこれを、時に「悪魔」もしくは「悪霊」と呼びます。悪魔の目的は、人間が神を信じて救われることがないように、人間から御言葉を奪い取ることです。時に、私たちは自分が悪魔となって誰かを罪へ誘惑する場合もあるし、自分自身が悪魔に誘惑されて罪に陥る場合もあります。キリストは「それをもたらさ

者は不幸である」と語ります。「これらの小さい者一人をつまずかせるよりも、首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである」と言うほどです。この処罰は、名実ともに存在を抹殺することを意味しています。罪の誘惑者になるということは、それほど恐ろしいことです。誘惑者は罪なき人を罪に引きずり込むことになるので、二度と他者を罪に陥れることができないようにされています。人をつまずかせる罪は重いものです。しかも、この罪はごく稀に起こるといふ事柄では決してありません。「一日に七回罪を犯しても、悔い改めたなら、赦してやりなさい」とキリストが言われるほど、罪は、私たちの日常の生活に散在しています。さらに、一日に七回罪を犯すのは、兄弟ばかりとは限りません。私たち自身にも起きうることです。この世で生きる私たちは、無数にある、また無限に現れるこの世の罪と向き合わなければなりません。一日に何度も罪と格闘しなければならぬ私たちですから、悪魔に入り込まれないように、いつも自分自身に心向け、注意する必要があります。けれども、私たち一人ひとりにも色々な時があります。時に誘惑に負けてしまうこともあるでしょう。しかし、キリストは「人間の弱さを、その人の責任にしてはならない」と教えています。3 節でキリストが「もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。」と言っているからです。兄弟が罪に落ちていくのを放置するのではなく、まず、あなたが先に愛を示して、吟味した言葉であなたの方から罪を犯した兄弟に問い掛けるのです。愛の業が常に先行する。これがキリストの教えです。ここに使われている「戒めなさい」は、キリストご自身が使われる言葉で「しかりつけた」と訳される場合が多い言葉です。その場合、キリストが叱る対象となるのは殆どが悪霊です。あるいは、悪霊に取り憑かれた人間の行為であり、悪霊が人間を不安に陥れる出来事です。キリストを信じる兄弟の中にも、罪の誘惑がありうることをキリストは見抜いておられます。それ故に、教会は罪を犯した人を処罰することを目的にしてはなりません。主の教会は、人間の弱さを責めることをせず、弱い者を支えることができなかつた、配慮が足りなかつた、教会の責任を問わなければなりません。キリストは、罪人の心が悔い改めに向くような配慮を教会に求められます。キリストの「戒めなさい」は、罪を犯した人の中から「まず悪霊を追い出せ」との命令です。兄弟が罪を犯したら、まずその兄弟から悪霊を追い出すように働きかけるのです。悪霊を追い出すためですから、厳しい忠告が必要です。しかし、忠告は楽しいことではないでしょう。相手を傷つけるのではないか、煙たがられ、嫌がられてしまうのではないか、そういう思いがあるものです。また反対に、相手が悪いと思う私たちの心には、恨みや妬みを含んでしまうこともあるでしょう。自分自身も、いつ罪を犯すか分からない私たちですから、兄弟への忠告が愛の心から出たものであるか、主にある業であるかどうかについて、思慮に思慮を重ねて、吟味しなければなりません。私たちは謙遜な思いで、主の業として、ふさわしい言葉で忠告できるように祈らなければなりません。

礼拝の時に、一人静かに我を振り返り、真に祈ることができたなら、私たちは謙遜になれます。しかし、多くの場合、問題は礼拝の時ではなく日常に起こります。礼拝の時だけ、

祈る時だけの謙遜では役に立ちません。毎日の他者との関わりの中に「つまずき」があります。罪への罣があり、罪への誘惑があります。礼拝の時の謙遜さが、日常でも生きなければならぬのに、なかなか、そうはいきません。

罪の悔い改めは難しいものです。同じように赦しもまた難しいものです。自分に非があった、落ち度があったと思っても、エゴが邪魔をして私たちは素直になれません。同じように、赦そうと思っても「赦せない」という感情に、私たちは負けてしまいます。そのような私たちは、兄弟に悔い改めが起こるように、私たち自身も悔い改めることが出来るように「わたしどもの信仰を増してください」と祈ります。しかし、信仰は主なる神から与えられるものであって、人間の努力や功績で獲得することは叶いません。信仰を増すこと、愛を増すことは私たちの共通の願いですが、この時の弟子たちは「わたしどもの信仰」と言って、自己満足的な信仰を求めているところがあります。弟子たちは、未だ信仰を理解することが出来ていません。

キリストが弟子たちを諭します。「もしあなたがたに小さなからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」信仰は大小ではなく、強い弱いでもなく、深い浅いでもない。信仰はからし種一粒ほどでいい。信仰は「あるか、ないか」この一点だと言うことです。からし種一粒というのは、本当に小さいものです。しかし、からし種一粒ほどでも信仰があれば、その小さき信仰を通して、奇跡を現実とされるのが神の出来事であります。桑の木は根が深く、人間の力で引き抜き、海に植え替えることは到底不可能なことであり、もしできたなら、それは奇跡です。けれども、人間が神の働きを妨げなければ、奇跡は起こります。

キリストは弟子たちに「自分に命じられたことを果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい」と教えます。

ある説教者は、この僕の生き方は弟子としての理想像だと語りました。後にキリストの使徒となったパウロが、フィリピの教会に宛てて書いた手紙にこうあります。「何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい」。この言葉通りに日々を過ごすことができたなら、御言葉に従うことが出来たらどんなにいいでしょう。

しかし、私たちは、主の僕としての自覚を持っていないながらも、どうしても、どこかで、自分の働きを人に見て欲しいところがあります。褒められたいという思いがあります。また、その反対に、評価してもらえなければ、ふてくされてしまうのが私たちです。しかし、キリストの望む僕は、自分のしたことを誇らず、思い上がることもせず、人の思いを大切にしてい、自分より相手が立つようにさりげなくできる僕です。

キリストの僕は、自分の報いを望まず、人に与えるのです。

僕とは奴隷という意味ですが、私たちはこの世の奴隷でも、誰か人間の奴隷でもありません。今日の旧約の42節で主なる神が「わたしの奴隷である」と約束してくださっています。神の奴隷には、人間の価値判断による「重要人物か」

「弱者か」などという区別は一切ありません。私たち一人ひとりの存在が、あるがままで絶対的価値を持っています。主において、絶対的価値を見出された神の奴隷ですから、私たちは命じられたことを果たしたうえで「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです」と言うことができます。「しなければならぬこと」それは、神の御旨に従うことです。御心に委ねることです。御言葉に生きることです。そのような弟子こそ、御国のために用いられます。

私たちの救い主イエス・キリストの生き方は、父なる神の御心に自分自身を服従させる生き方でした。弟子たちが裏切ろうとも、十字架に磔にされてもなお、主の御心に服従する生き方を貫きました。私たちは、なかなか御心に従い得ない者です。繰り返し罪を犯してしまうでしょう。しかし、同時に繰り返し御言葉を聴き、主の教えに従おうとするなら、悔い改めることができます。悔い改めると言うことは、赦しを求めることに通じます。「我らに罪を犯す者を赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」と繰り返し、主の祈りを祈るのが私たちです。

私たちにも、からし種一粒の信仰が、確かに与えられています。からし種一粒ほどでも信仰があるなら、私たちもキリストの後に続くことが出来ます。信仰があるなら、それがどれほど小さく弱くあっても、誰もがありのままの自分で価値ある者として神が用いてくださいます。それは、たとえ目がかすみ、耳が遠くなって、体も動かなくなったとしても、私たちの神は、僕に使命を与え用い尽くされる方です。私たちは主に生かされ、感謝しつつ生き抜くことができます。心から、微弱で欠点だらけのものです、取るに足りない僕ですと告白することができます。これほどの恵みはありません。

私たちは、この恵みによって与えられている「からし種一粒の信仰」によって、終わりの日まで、目を覚まし、祈りつつ、主を望み、御言葉に聞き従って、主の僕として、共に歩んでまいりましょう。祈ります。

聖なる神。家庭礼拝となって9週間、私たちはそれぞれに、様々なことがありましたが、あなたが御手をもって、導き、支え、その都度、助けてくださったことを心より感謝いたします。主よどうか、あなたからいただいた『からし種一粒の信仰』を私たちが決して無くすことがありませんように。私たちが、御心にかなって、なすべきことをなし、互いに赦し合い、謙虚に生き、あなたの御名をほめたたえる者となれますように。主の御名によって祈ります。アーメン。

讚美：讚美歌543

献金

主の祈り

黙禱